

「んううっ！ んア、あ、あっ……ひうっ……」

「もしかして、ズボンの中にあんのかな？」

「ふえ？ あ……ダメ、ダメえ！」

まだ続く尾てい骨への愛撫に意識が朦朧としてきた頃、不意にディーノさんの呟きに混じってカチャカチャという金属音が耳に響いた。

ふと視線を落とすと、ディーノさんのもう片方の手がいつの間にか股間に移動していて、オレのベルトを外そうとしている。慌てて止めようとしたけれど体が力が入らなくて、もたもたしている内にズボンの前は呆気なく寛げられてしまった。

「うく……んっ……」

ディーノさんの手がパンツの縁から滑り込んできて、尾てい骨と一緒にジンジンしていたトコロを握ってくる。

「お、これが尻尾かな？」

「やっ……違……」

「違うのか？ じゃあ、これは何？ 何かすっげえ熱くて硬くて、先つちよの方がヌルヌルしてるんだけど」

「!? そんな、こと……言わ……ないで、くだ……ん、あぁっ……」

勃起しちゃってるのは分かってたけど、ヌルヌルなんて、そんな……

否定しようとしたけれど、アソコを弄られる気持ちよさに喘いでしまつて、上手く言葉が出せない。

「なあ、ツナ。これ、尻尾じゃなかったら何？」

「デイ、ディーノさんの……いじ、わ……あはっ……分かってる……クセにい……」

「分からないから聞いてるんだけど？」

「……」

「ツナが答えてくれないなら、自分で確かめるか」

そう言うと、ディーノさんはやわやわとオレのアソコを握りながら、尾てい骨を撫でていた手を腰へと這わせてくる。

「えっ……ダメ……ダメ、です……」

ふるふると首を振ってささやかな抵抗をするけれど、ズボンごと下着を腿の途中までずり下ろされてしまった。

「ピンク色の尻尾がピンツッて勃ってる」

「~~~~~っ!!」

腕がされて、どうなっているのか見られて、見せられて、ただでさえ恥ずかしいのに。

ダメ押しみたいに囁かれてどうにかかなりそうで、オレは逃げるようにギュッと目を瞑った。

（もうヤダよ、こんな恥ずかしすぎるの……そうだ！ このまま時間切れまで粘れば……）

そう考えて、これ以上声を漏らさないようにグツと固く口を結ぶ。

「っ?!」
「っ?!」

口を開かせようとしているのか、アソコを握る手がまたそろそろと動き出して快感を与えてくる。

「そうだよ、見逃してくれるワケないよね……」

反応しないようにと抵抗するオレに、ディーノさんが何もしない訳がない。

それでも必死に耐えて声を出さずにいると、細い指の一本が